

特集「ナショナリズムの表現」：江戸時代の一般民衆の国家空間意識の形成における「旅」の役割

著者	ゴットアルド マルコ
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	139-149
発行年	2010-08-10
URL	http://doi.org/10.15002/00022630

江戸時代の一般民衆の 国家空間意識の形成における「旅」の役割

マルコ・ゴットルド

江戸学は今日日本で、また世界のいたるところで、研究者の間で盛んに論じられている研究分野である。このワークショップが行っているように、その中でもある特定のトピックに研究者たちの関心を集めることは、見過ごされがちな重要な要素やパターンを発見することにつながると思う。本発表がそれに少しでも貢献できれば幸いである。

以下の私の発表は、何か新発見の資料を分析・紹介するといったものではなく、江戸時代の民衆宗教を研究する立場から、江戸時代の国家意識のあり方を取り上げる上で、可能なアプローチの仕方をいくつか提案する、といったものであることを、最初にお断りしておく。

ナショナリズム

田中優子先生からお話を頂いたとき、正直に言えば、江戸時代のナショナリズムというトピックに多少当惑を覚えた。なぜならばまず第一に、私の研究トピックが、富士信仰という江戸時代の民間宗教運動であるためだ。確かに富士山は、日本地図において、一種の日本の中心として描かれるようになる。しかし富士信仰におけるテキストや図像には、広くゆきわたった強力なナショナリズムの要素というものは見られないのだ。

もちろん富士山は「三国第一山」と呼ばれていた。しかし、富士をえがく縁起や文献の内容は、真に国際的なスケールというよりも日本そのものに焦点をあてているように思える。そのうえ、富士信仰において、富士山は「世界の中心 アクシス・ムンディ」と見なされていたが、その意味合いは須弥山という

よりは蓬莱山に近いものだった。つまり、富士山は世界を支える柱としてよりも、不死の人々の世界に近いものとして捉えられていたのだ。また、この時期に作られ日本中に普及していた暦において、その冒頭に用いられる図像は、富士山ではなく須弥山の図だった。そうした暦の一つが、1842年版の「天保新選永代大雑書萬曆大成」である。この、日本というよりも天竺のものである仏教的シンボルが、当時の宇宙観における中心的原理だったのだ。

宇宙観を支えるこの仏教的枠組みはまた、江戸時代を通じて描かれた世界地図の基本でもあった。例えば、1710年の「南瞻部洲萬國掌葉之圖」がある。この地図の原型となったのは1364年の源春房重懐による「五天竺の図」で、これは須弥山の南にある閻浮提の地図だ。同様の図像パターンの非常に早い例は、749年に作られた東大寺大仏の台座にみることができる。それらに比べれば、この「南瞻部洲萬國掌葉之圖」では、日本の形はより地理的に正確に描かれ、大陸に対して現実以上に大きく描かれるようになっている。それでもやはり、日本の地図上では周縁部の存在として描かれているのだ。

同じ頃、18世紀初期に、日本には世界地図もあったが、それらは蘭学を通じて日本に入ってきた西洋の原型に基づいたもので、地理的にかなり正確なものだ。1645年の「萬國総図」は、その重要な一例である。しかし私がここで興味があるのは、地理学的に正確な地図ではなく、当時の宇宙観を象徴的に描くタイプの地図だ。これら象徴的な地図において、その基準はいまだに、宇宙の中心に須弥山をいただき、閻浮提に付随するものとして日本を描く、仏教的宇宙観だったのだ。要するに、宇宙の中心的柱というナショナリズム的シンボルとしての富士山の可能性は、富士信仰によってごく部分的に追求されただけだった。大陸を世界の中心として捉える地図モデルの方が、江戸時代においてはるかに広範囲に享受されていたのだ。

江戸時代のナショナリズムというトピックに私が当惑した第二の理由は、「イズム」としてのナショナリズムを、もっぱら江戸時代の国学といった一部の知識人たちの運動や、とりわけ明治維新と結びつけて考えていたからだった。明治時代におけるナショナリズムの一例が、例えば1881年の東北や北海道への天皇の行列すなわち御巡幸である。そこには、西洋式の軍隊の制服や乗り物、天皇の旗、そしてこの非常によく組織された行列を見守る人々がいた。このイ

メージについては、また後ほど触れる。ともかく、私自身の研究は明治時代を扱っておらず、江戸時代について言えば、小数の孤立した知識人たちによる著作ではなく、民間宗教を研究対象に選んだわけなので、今回の発表において何を論じるか決めかねた、というわけだ。

とはいえ、この点についてより考えてみると、国家主義としてのナショナリズムではなく民間レベルについて私が語れることがある、それは、江戸時代に民衆の間に広まった「国家空間の意識」の形成という問題だと気付いた。今から述べるのはこの問題に関わるいくつかのアイデアだが、とりわけこの国家空間意識の基盤となる重要な要素、すなわち「旅」の役割について述べたいと思う。

移動の規制

まず第一に、人の移動の非常に特異な組織化と規制が、江戸時代の最も重要な特徴の一つだと私は考える。1630年代以降、徳川幕府は二つの正反対の方向に向かう人の移動のコントロールを行った。まず、幕府は参勤交代という制度を通じて日本国内の人の移動を促し、江戸への求心的な動きを促進した。参勤交代のおかげで、日本の各地を将軍のお膝元、江戸へと結びつける強力な街道システムが発展したのだ。

五街道は旅行のための主要な道路網となり、旅行のための交通機関や宿泊機関が続々と発達した。それらは当初は大名行列のためだったが、後にはより多くの庶民が日本国内を旅することを可能にする。これについては後でまたとりあげるが、ここで強調しておきたいのは、17世紀前半における参勤交代制度の完成まで、日本国内の旅行は非常に困難かつ稀であったという点だ。それは、役人や一部の宗教家、巡礼を志す貴族にのみ限られていたのだった。その意味で、旅行という行為は存在したけれど、それは江戸時代のような大衆の行為ではなかったのであり、それゆえ、その文化的行為としての重要性は副次的なものだったといってよいだろう。

また私は、旅をコントロールするこのやり方の象徴的意義についても強調したいと思う。五街道は江戸城から出発するように作られており、それによって

江戸が日本の中心かつ運動の機軸であることが明らかにされた。また、五街道のそれぞれが江戸城の堀と交わるところに神社が置かれたというのはかなり面白い現象である。それらの神社はすべて、平将門の怨霊にまつわるものだった。平将門は939年、関東において天慶の乱を起し、自ら親皇であると名乗る。殺された後、彼の首は後に江戸となる土地において首塚として祀られたが、幕府を江戸に開くにあたって、将門の怨霊の扱いは非常に重要な問題であり、天海がそれに対処する任についた。その結果、将門の首や体の他の部分、鎧や兜を埋葬し、祀る神社が、主要な橋や江戸城の門の傍らに戦略的にたてられ、江戸城および江戸城からの、あるいは江戸城への旅を守護するものとされたのだ。そのなかで最も重要な2つの神社が、首塚と、将門の第一の神社である神田明神である。両神社は江戸城の北と東北におかれているが、それは陰陽道と仏教において最も重要な方角だった。ちなみに京都においては、皇居周りの四つの方角は、戦の神である大將軍と、様々な方角の守護に関わる遊行神によって守られていた。古代日本の貴族たちにとって非常に重要だった方忌みや方違えといった制度そのものが、大將軍と他の遊行神たちが四方を動く動き方によって規定されていたのだ。

今少し脱線したその理由は、旅行や移動の方角が、日本の歴史の大部分を通じてもっていた非常に重要な意義を示すためだ。これゆえに、幕府は強力な大將軍に匹敵する軍人の霊を祭ることによって、幕府の中心を守ろうとしたのだった。大將軍はしばしば妙見菩薩と同一視されたが、これは仏教という北極星のことである。北極星は空の中心であり、おおぐま座の七つの星がそのまわりを廻っているが、一方、大將軍も7つの軍神を従者として従えており、彼を加えて八將軍と呼ばれている。興味深いことに、将門の有名なエピソードの一つに、「七人の影武者」の物語がある。これは、彼が自分にそっくりな六人の影武者の従者を持っているゆえ、全部で七人の将門がいるように見える、という話である。

つまり明らかに、江戸幕府にとって旅や移動は、古代の宮廷におけるそれと同じくらい重大な問題であり、幕府が人の移動の規制を非常に重要視した理由も、ここにみることができる。また、将門の怨霊鎮めを江戸において組織した天海によって、家康自身が日光において東照大権現として祀られたという事実

も考慮しなければならないであろう。家康は北極星と同一視され、日光の陽明門の夜の写真が示すとおり、実際日光のレイアウトそのものが、北極星に合わせて作られているようなのだ。その意味で家康が宇宙空間の中心とみなされているように、江戸城にいる彼の子孫達は同様に地理学上の空間の中心にいるわけだ。このように考えれば、徳川時代における空間の構成に、我々はずっと注意を払わなければならないと言わざるを得ない。では次に、その空間構成の一面、すなわち、江戸時代における国家空間の形成という今回の私のトピックにもどりたいと思う。

徳川幕府が実行した移動のコントロールの二つ目は、同じく1630年代に始まった「海禁」、すなわち遠距離航海の禁止である。大型船舶を造ることはできなくなり、従って大陸への旅は実際問題として不可能になり、また法によっても禁じられた。言い換えれば、幕府は日本から離れる遠心的な動きを禁じ、海岸沿いの航海のみを可能としたのだ。

移動をコントロールするこれら二つの規制の結果が、江戸時代における、日本という国の意識の形成だった。実際、旅行という観点からみれば、日本という国を機能的な意味で定義することが可能になった。すなわち、そこからの遠心的移動が禁じられる、つまりそこから離れることが禁じられる国であり、また求心的移動が促進される、つまりその中での移動がより当たり前でたやすいものになっている土地、として定義できるようになったのだ。日本の歴史においてこれはそれまでになかった事態であり、世界の他の国々と比べてみても非常に特異な状況である。この理由ゆえに、移動の制限は江戸時代における民衆レベルでの国家空間意識の形成にとって根本的であったと私は考える。

国家空間と民衆文学

とはいえ、日本国内の、また国内だけの移動は、国家空間意識の形質にとって重要な唯一の要素ではない。今ひとつの重要なポイントは、この時代の大部分における長期的な平和である。この平和のおかげで庶民はより自由に移動することができたのだ。徳川時代中期には、一般庶民が旅行をする能力と、高い識字率とが結びついた結果、高度に豊かな民衆の旅行文学が生まれた。こ

の文学ジャンルには道中、東海道の宿場などの双六、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』などが含まれる。様々な意味で、これらの旅行文学はガイドブックとしての機能ももっていた。道中は、場所と場所の間の距離や他の具体的なデータを記録し、双六は道沿いの様々な名所の景色やそれぞれの土地で手に入る名物を簡潔に要約する。『東海道中膝栗毛』のようなより物語性の高い文学は、東海道沿いの様々な土地の地元方言や慣習のこっけいなエピソードを読者に提供した。

ある意味で、旅に関わるこれらあらゆる形式の印刷物は、地元の慣習や名物や方言を国中に広めるのに用いられたのだった。当時の高い識字率のおかげで、実際に旅行することができない人々でも、文学を通じて旅を疑似体験することができたわけだ。実際の旅行と文学上の旅行は、同じ結果をもたらした。それらはどちらも、土地ごとの慣習や文化の多様性を旅という一つの物語のなかに統合したのであり、その物語は先ほど説明した二種類の移動規制によって機能的に定義された境界ももっていた。つまり、機能的な境界を備え土地ごとの豊かな多様性を含む国家空間というものの意識が民衆レベルで形成されるのに、旅行文学の普及は大いに貢献したと考えられるのではないだろうか。

江戸時代において栄え、私が今まで論じてきた移動の規制と深くかかわっている今ひとつの旅行文学の形態は、想像上の旅行文学である。この一例が、1763年の平賀源内の『風流志道軒傳』である。主人公浅之進はまず日本全土を旅し、それから蝦夷に、さらには扇にのって海をこえて想像上の国々、すなわち巨人の国、小人の国、胸に穴の開いた人々の国、足長の人々の国などに行き、さらにはオランダやスマトラといった「実在する」外国へも旅する。その後彼は「女の島」に行くが、その島は基本的に裏返しの吉原として描かれている。そしてついに彼は江戸の浅草に戻る。

ここにあるのは明らかに、日本と外国の文化を対比する意識である。もちろん、この時代外国との実際の接触が極度に少なかったため、ここで描かれる外国はおおた想像力で作られたものだった。平賀源内はまた、非常に外見の異なる人々を、彼らが居住する国と組み合わせる際に、前述した「萬國総図」などの世界地図も利用している。と同時に女の島のような想像上の国々を描く際には、閻浮提に似た地図をも使用している。

ここに、日本を世界の他の国々よりも優れたものとしてみるナショナリスティックな言説の可能性をみることは、可能であろう。しかしながら、ここでは「違い」が、たとえば『東海道中膝栗毛』とは違った意味で用いられていることを強調しておきたいと思う。喜多さんと弥次さんが出会う「異なる」人々が、それでも彼らと一定の共通点を共有していたのに対し、浅之進が違う国々で出会う人々は、見かけにおいても極端に違っていたり、あるいはまったくすべてが正反対の文化的環境に住んでいる。平賀源内は、ある意味で、想像によって作られた「日本ならぬ」空間や「日本ならぬ」特質との対比において、日本という空間と独自性という理念を結晶化しようとしたようなのだ。

想像上の旅行文学の興味深い変異体の一つが、18世紀以降に数多く作られた虚構の場所の地図である。そういった例の一つが、1777年の道蛇楼麻阿（朋誠堂喜三二）による「大日本國之図」だ。ここにおいて、吉原は「大日本國之図」のような日本地図をモデルとした一連の島として描かれている。この吉原は奇妙ではあってもよく知られた形をしている。それは日本地図によく似ていて、かつ実際の吉原と同じ格子状の通路によって仕切られているのだった。つまり、よく見知ったものと見知らぬ奇妙なものが渾然一体となっているわけだが、それはちょうど、江戸の民衆文化の中心に属していながらも、同時に周縁的な場所でもあるという吉原のあり方を反映している。この想像上の空間内の移動は、その効果において、ありふれたものと奇妙なものが同時に現れるという『東海道中膝栗毛』における旅と同様である。

今ひとつの想像上の旅行文学の例が、19世紀初頭の暁鐘成の「萬客之全図」である。この無数の客からなる地図は、「萬國総図」のもじりだ。列島は「恋」という漢字の形になっており、島の一つ一つが遊郭の客のタイプを表している。この種の遊郭のガイドマップは、国家空間についての論議からは少々離れるが、江戸時代末期における旅行や旅の案内本の人気の程を示してくれる。それゆえ、国家意識を構成するメカニズムが移動と旅の規制に結びついているのであれば、旅行が大ブームとなった江戸時代末期には国家意識がはるかに広く普及していたということを、これは示唆しているのであろう。

宗教と旅

では、今回とりあげるトピックの最後にうつりたいと思う。すなわち、民間レベルでの国家空間意識における一要素としての、宗教的旅というトピックだ。これまで、私は旅一般について話してきたが、実際のところ、江戸時代において一般庶民による旅のほとんどは宗教上の目的ゆえになされていた。四国のお遍路や伊勢参り、富士などの遠路への巡礼は、江戸時代後期に極めて人気となる。旅行の目的が巡礼である場合は、地元の檀家寺から通行許可を得るのは比較的たやすいことだった。

この時代の巡礼の人気、とりわけ伊勢や富士といった場所への巡礼人気を考えれば、近世の国家空間形成における宗教の重要性は当然考慮すべきだ。巡礼は、聖なる場所への旅としてのみ捉えるのではなく、様々な場所を一つの国という単位の中に象徴的に統合する強力な道具としても捉えるべきだと私は提案したいのだ。

実際、巡礼の旅はそれ自体が、家から聖なる場所へ、それからまた家へという道筋沿いの線をつなげる行為である。この旅行を通じて、巡礼者は様々な慣習や文化に出会い、また当人の宗教的動機が高い場合には、様々な地方の神々や修行形態に出会うことになる。とはいえこれは、巡礼者にとっての一つの統合機能にすぎない。巡礼者が家に戻る時は、お守りや魔よけ、薬、様々な地元の縁起や宗教的物語などを持ち帰るものであり、それらを通じて、家を離れたことのない人をも、彼が旅してきた象徴のネットワークへと結びつけることになる。このようにして、巡礼者は自分の地元の共同体を、より大きな象徴的・宗教的ネットワークにと結びつけるのである。しばしば軽視されているが、これこそが、巡礼がもつ極めて重要な機能なのだ。

宗教的移動もまた、国家空間意識の形成を大いに促進した。実際、各地域における信仰のあり方は多少異なっているが、巡礼者たちは、故郷から離れた場所でも、自分たちの信仰のあり方と共通する基本的な特徴に気付く事ができたであろう。こうした巡礼者達の体験は、それ自体一つの研究トピックとして興味深い。

もう一つの宗教的移動の重要な役割は、江戸時代における流行神の普及であ

る。とりわけ効果があると見なされた地方の神が、図像やお守りの形で国中を旅してまわり、他の地域にも根を下ろすという現象で、1855年の安政の大地震の後の鯰絵の流行や、疱瘡神などが、これの例である。このように国中を旅する神々もまた、地域ごとの多様性はあっても単一の国の空間に自分達は生きているという感覚を、民衆レベルで強固にするのに役立ったことであろう。

また、宗教的な旅行者は巡礼者だけではなくということにも触れておくべきだろう。実際、日本全国の街道や江戸などの大都市の路上は、遍歴するさまざまな宗教者たちで溢れていた。節季候や厄払いといった悪霊払い、虚無僧、鹿島の事触れといった演奏者、高屐、高野行人、願人坊主、熊野比丘尼といった、遍歴する神官・尼・僧、それに陰陽師と山伏などが、歩き回り、歌い、踊り、楽器を奏し、お守りや薬を売り、占いをし、お告げを語り、仏教の教えを説いていた。これらの遍歴する下位の宗教者たちの行為の総体は、象徴的・宗教的なネットワークを作り上げ、強め、広げてきた。この象徴的・宗教的ネットワークが、江戸時代において日本を一つの国家空間にまとめあげるのに貢献したものと思われる。日本文化という意識の確立と普及にこれらの宗教者たちがはたした役割については、更なる研究が必要だと私は考える。

移動と近代

最後に、明治維新以後における旅の役割について簡単にコメントしたいと思う。江戸時代において旅は国家空間意識と関わっていたが、明治時代における状況はかなり異なっている。明治天皇の御巡幸をみてみれば、そこにおける新しい要素に気付かされる。

まず第一に、この種の旅の根底にある特徴は、それが均質で標準化されているという点にある。標準時刻、義務教育、徴兵、厳密に同型の兵士の制服など、明治政府は日本における生活のほとんどありとあらゆる側面に規格と規則を押し付けた。医療と公衆衛生も規格化され、日本人の身体もまた規格化される。正しい、あるいは正しくないプロポーションという規格が、日本人の体に適用されたのだった。

江戸時代において、国家空間意識は地域ごとの文化や慣習の多様性の理解に

基づいて形作られていたが、明治時代はそれらを均質化し、全ての人に従うべき規格を作り出した。国家はいまや、多くの地域ごとの多様性の混合体ではなく、それ自身の規格と規則をもった独立した存在物となった。これらの規格は人工的なもので、この土地に生きる全ての人々の上に強制されるようになる。実際の多様性という現実となんらの関係ももたない、この抽象的な存在物が、真のナショナリズムを推進する背後の力となったのであった。

天皇の御巡幸にみられる第二の要素は、私の最初のトピックに関わるものである。実際、このページントの焦点が、国全体を天皇が移動することにあることは明らかであった。これはもちろん、それまでにない出来事だった。なぜなら、それ以前は、天皇は皇居から外出することすらめつたになかったのだから。ところがいまや、国家の企画の大掛かりなショーにおいて天皇が展示されている。つまり、国家の象徴が、自ら各地域を結びつけているのである。江戸時代においては地方の周縁部が、巡礼者や旅人、宗教者、文学上の登場人物といった形で国中を動き回ったが、近代になると、むしろ国中を旅して回るのは国の中心なのだということができるであろう。

これらの天皇の御巡幸は、すでにある構造、すなわち国家意識の確立のための移動や旅行という重要な構造をとった。しかし、そこには天皇という新たな宗教的、政治的な要素が付け加わる。そうすることによって、御巡幸はすでにあった構造を、ナショナリズム意識の確立のための道具としたのだった。国家空間を組織するという旅の重要性、という観点から見れば、1869年の京都から東京への天皇の初めての旅は、日本歴史における新しい時代の始まりとして位置づけることができるであろう。

<ABSTRACT>

The role of “movement” in the creation of a sense of national space at the popular level in the Edo period.

Marco GOTTARDO

Movement (i.e. travel) in the Edo period was controlled through the *sankin kōtai* (alternate residence in Edo) and the *kaikin* (maritime prohibitions). The first (centripetal) enforced periodic travel to Edo by the daimyō; the second (centrifugal) prohibited travel across the sea. We can say, therefore, that “Japan” was defined functionally in terms of movement: “Japan” is the geographical area within which travel must be carried out, and outside of which travel is not permitted.

During the Edo period, commoners travel more and more, along the main highways developed for the *sankin kōtai*, and thus this functional definition of Japan as a separate entity is experienced at the popular level as well. A major form of popular travel are the many pilgrimages throughout the country, and conversely a large number of itinerant religious figures join the pilgrims in spreading the local religious ideas and customs throughout Japan.

With the huge literacy rate of the period and its vibrant book culture, travel literature booms at the popular level. Fictional travelogues are used as guidebooks to illustrate the different customs of far-away regions of Japan, thus contributing to the understanding that Japan is a single “nation” with local cultural variations. Imaginary travelogues to foreign and imagined lands juxtapose Japanese to foreign cultures, thus contributing to the establishment of a sense of belonging to a single nation.

The paper concludes with some considerations on how movement was exploited also by the Meiji government to construct a sense of nation in the tennō's subjects. The case of the imperial pageantries (*gojunkō*) is analyzed as paradigmatic in this context.